

日本通訳学会第3回年次大会 シンポジウム (2002年9月23日)

シャドーイングをめぐる議論についての私見 ～シンポジウム報告への補足～

田中 深雪
(立教大学)

1. はじめに

現在日本では、シャドーイングは、通訳教育だけでなく一般の語学教育の中でも利用されるようになってきている。従来は、同時通訳の導入の際の訓練法のひとつとして利用されていたものが、今では大学の通訳クラス、さらには予備校や塾、高校の英語の授業にも取り入れられるようになってきた。

しかし残念なことに、シャドーイングとは一体何なのか、具体的にどんな練習のことを指すのか、またその練習にどんな効果があるのかといった、基本的な点について多くの見解があり、本学会内でさえコンセンサスが十分にとれているとは言えないのが現況である。そのため、実際の指導現場では少なからず混乱が生じているところもある。

このような状況の中、今回の日本通訳学会年次大会でのシンポジウムにおいて、シャドーイングの研究に長く携わっている玉井氏を講演者に迎えて、シャドーイングに関する多くの課題について意見を交わす機会を持てたのは、たいへん有意義であった。

さて、今回のシンポジウムで私が取り上げた点は、以下の2点である。

1) シャドーイングの定義について

a) 定義の中に遅延時間についての記述を入れるべきか。

2) シャドーイングとリピーティング練習の違いについて

a) シャドーイングのように、聞きながら声に出すメリットはどこにあるのか。

b) リアルタイムでの瞬間的反復は、リピーティングでは無理か。

c) リピーティングでも「復唱技術」は向上するのか。

ここでは、これらの問題提起について少し補足するとともに、シャドーイングをめぐる今後の課題について私見を述べたいと思う。

TANAKA Miyuki, "Supplementary Notes on the Symposium."

No. 2, December 2002, pages 211-214.

(c) 2002 by the Japan Association for Interpretation Studies

2. シャドーイングの定義について

シャドーイングの定義については、多くの人が言及している。しかし、まだはっきりした定義があるわけではない。今回の講演の中で、玉井氏はシャドーイングを、

“Shadowing is an act or a task of listening in which the learner tracks the heard speech and repeats it as exactly as possible while listening attentively to the in-coming information.” (Tamai, 1997)

と定義した。また Lambert 氏は、シャドーイングは

A paced auditory tracking task which involves the immediate vocalization of auditorily presented stimuli, i.e. word for word repetition in the same language, parrot-style, of a message presented through headphones. (Lambert, 1988)

と定義している。さらに、水野氏は『応用言語学事典』(近日刊行予定)で、

「原スピーチを聴取しながらわずかに遅れてすべての言葉を繰り返すこと。」

と説明している。このように、ここに示した 3 者の例を比較してみただけでも、微妙に異なっていることが分る。

さて、この定義に関する問題の中で、今回、私は「定義中の遅延時間の記述の有無」という点を問題として取り上げた。Lambert 氏と水野氏の定義の中には、遅延時間についての言及があるが、玉井氏は言及していない。それはなぜなのか？

その理由として玉井氏は、まず「遅延時間については、さまざまなレベルの遅延があっても良い」点を挙げた。これはシャドーイングが、学習者のニーズに合わせて柔軟に対応させることができる訓練法であることを示している。したがって、シャドーイング練習の目的を「音の聞き取り」、あるいは「プロソディ・センス」の養成にフォーカスするかによっても、若干遅延時間は変わってくるだろう。このように考えていくと、定義の中に遅延時間についての記述がないのも一理あると思った。

さらにもうひとつの理由として、玉井氏は「シャドーイングそのものが、通訳トレーニングから生まれてきたひとつの指導上のタスクであって、今まではあまり定義がきちんと述べられなかった」点も挙げた。言い換えるならば、「シャドーイングはもともと遅延時間に厳密に言及するようなものではなかった」のである。

この点については、たしかに以前はシャドーイングは通訳者養成の場で使われることが主であったので、どのくらい遅れるのが適切かといった点は問題とならなかった。しかし、現在のように、通訳教育とはなんら関わりを持たない、一般の語学教育のみを専門とする人

が指導に当たっているような状況では、従来よりもずっと具体的に、シャドーイングはこのように行うといったいわば **how to** に関する点のみならず、何のための練習であるのかといった点も含めていく必要もあるのではないだろうか。

少なくとも、これからは必ずしも定義の中に遅延時間などについて言及する必要はないとしても、何かほかの形でその取り扱いを併記しておくことは必須になってくるであろう。

3. シャドーイングとリピーティング練習の違いについて

次にシャドーイングの具体的な効果について検証するため、リピーティングと対比させながら、その違いはどのあたりにあるのかといった点を玉井氏に尋ねた。シャドーイングがリピーティングと大きく異なる点は、文を聞き終わらずにリピートする点にある。しかし、英語の習熟度が低い学生にとっては、このように英語を聞きながら話すことがかなり難しく思われるようである。そのため、「なぜ、リピーティングのように最後まで聞かせてくれないのか」とか、「なぜ、話しながら声に出さなければならないのか」といった質問をよく受ける。これに対して、今まで明確な返事が出せずにいた。

この点について玉井氏は、シャドーイングの練習を行なうことによって、「学習者は入力音声の同時的かつより正確な復唱技術を向上させることができる」こと、および「その復唱技術の向上により、より正確な入力音声の認知が可能になる」という点を指摘した。さらに、文単位で聞いたものを聞き終わってから繰り返すリピーティングも、シャドーイングとは異なった性格を持つ指導法ではあるものの、「入力された音声の保持に適している」点や、「復唱技術の向上にも貢献している」点も指摘した。

ということは、一般の語学教育を指導する立場にある者は、このようなシャドーイングとリピーティングの異なった特徴をよく理解し、それぞれの訓練の長所を生かしながら、学習者のニーズに合わせた指導目標を設定し、適宜組み合わせながら弾力的に利用していく必要があるということになる。あらためて、指導者の力量が問われることになる。

今まで私は、大学の通訳クラスなどでシャドーイング練習を行なってきたが、どちらかというと慣習的に、授業のウォーミング・アップとしての使い方が中心になっていたように思う。これを機に、何のためにシャドーイング練習をさせているのか、その目的をいっそう明確にし、またその目的に適合した導入の仕方や指導法を編み出さなければならない、ということあらためて認識した。

また、今回はほとんど取り上げられなかったが、シャドーイングとプロソディセンスへの影響の点についても、もっと議論する時間があれば良かったと思った。

4. 今後の課題

シンポジウムに先立って、近藤会長から「シャドーイングの有効性を一般的に言うだけでは意味がなく、たとえば何のための訓練として使うのだったら意味がある、何には役には立たない、どういうシャドーイングの練習の仕方をさせたら意味があるのか。何はさせてはいけ

ないか、ということが論じられなければならない」との発言があった。

シャドーイングに限らず、語学教育に関する手法には、その定義や指導法に関する議論は必須である。これから先、シャドーイングがより広く、通訳者養成だけでなく、多様な語学教育の場で活用されるようになるには、通訳の世界に携わる人間だけでなく、広く一般の語学教育関係者にも通じる形で、シャドーイングとは一体何なのか、何のために練習するのか、その練習目的や効力を明らかにしていかなければならないと思う。

シンポの中でも述べたが、現在日本にシャドーイングについてのまとまった文献がほとんど見当たらないというのも、淋しい限りである。本学会として、何らかの取り組みができないだろうか。できれば、今回のシンポを1回限りのものとして片付けるのではなく、これを契機にシャドーイングについて議論を深め、個々の問題点や指導法を検証していけたらと思う。シャドーイングとその指導法について、学会の内外を問わず広いコンセンサスを得ることができるかどうか、それが今後の大きな課題になるであろう。

筆者紹介：田中深雪 (TANAKA Miyuki) 立教大学・フェリス女学院大学講師（非常勤）。コロンビア大学ティチャーズ・カレッジ修士課程修了(MA in TESOL)。ボストン・チルドレンズ・ミュージアムの東アジア部門学芸スタッフとして展示・教育・通訳業務に従事。その後各種会議通訳を務める。日本通訳学会通訳教育分科会担当理事。

【参考文献】

- 玉井 健 (1997) 「シャドーイングの効果と聴解プロセスにおける位置づけ」『時事英語学研究』 vol. 36: 105-116 日本時事英語学会
- 水野 的 (2003 刊行予定) 『応用言語学辞典』 研究社
- Lambert, S. (1988). A human information processing and cognitive approach to the training of simultaneous interpreters. In Hammond, D. L. (Ed.). *Languages at Crossroads, Proceedings of the 29th Annual Conference of the American Translators Association*. 379-388.